

「国語グループ」

1回目の授業について

- ・ことばの学習
- ・～うごきのことば～
- ・児童の構成 小学部児童 女子 3 名
段階 II 段階

- ・いろいろな種類の動詞の言葉を聞いて理解することができる。
- ・動詞を活用した簡単な文章を考えることができる。
- ・言葉でのやりとりを聞いたり伝えようとしたりする
ことができる。

<1回目の授業研を終えて>

授業評価の視点

物理的環境支援

- ・机上の整理、明るさ配慮できた。学び合いのことを考えると座席の配慮が必要。
- ・お互いの顔（様子）がもう少し見えても良いかなと感じた。
- ・他の授業が大きな声で聞こえていた。

授業評価の視点

補助的支援

- ・ 実態差や経験が少ないことを考慮する。
- ・ 授業内容に見通しを持てるよう工夫が必要。
- ・ 下書きや書見台があるとよかった。

授業評価の視点

人的支援

- ・ S T がハーフタイムなので、児童との関わりが少なく実態把握がまだ進んでいない部分がある。
- ・ 「ぼうし（が・を）」のやりとりでも、児童の発言内容をホワイトボードに書いて他の児童にフィードバックさせてあげると、より集団での学習の効果が出たかもしれません（その後の「てがみ」では書いていた）。

授業評価の視点

学習評価

- ・ 授業の他にも一つ一つの言葉を体験する機会を設定する。
- ・ 新出単語を教室に貼り出して、一日一回その単語を実際に使ってみる。
- ・ 友達の意見を聞いて、意見を話し合う機会の設定。

< 2 回目の授業研を終えて >

授業評価の視点

物理的環境支援

- ・ 机上の整理、明るさの調整、周りの声や音の軽減を図り、授業に集中できるように環境整備を図る。

< 2 回目の授業研を終えて >

授業評価の視点

補助的手段

- ・はじめに学習内容や目標を提示し、授業の見通しを持てるようにした。
- ・コミュニケーション手段として、文字盤やカード、選択肢を活用し、児童の考えを引き出した。
- ・参考資料（説明文）の提示やiPadの検索機能により、調べたり手掛かりを見つけたたりできるようにした。
- ・活動によっては、下書きや書見台を活用した。
- ・児童が興味を示す教材や題材を取り入れ、それらに注目できるよう提示の仕方を工夫した。

授業評価の視点

人的支援

- ・ STと児童の実態や指導について共通理解を図った。
- ・ 発達段階に応じた呼称や関わり方、認知面（記憶力や空間認知）の実態に応じた適切な情報の提示を心がけた。
- ・ 肯定的な言葉がけにより、学習意欲や達成感を感じられるようにした。

授業評価の視点

学習機会

- ・ 授業の中に小課題をいくつか設定することで、集中力を高められるようにした。
- ・ 友達同士で問題を出し合う場面を設定し、視点を広げたり考えを深められるようにした。
- ・ 実際に説明をする／聞くなど、学んだことを体験する機会を設定した。
- ・ 学んだことをプリントにまとめ、学習の積み重ねを実感したり、生活場面でも活用したりできるようにした。

授業評価の視点

多様な評価

- ・ 毎時間、振り返りシートを活用し自己評価に取り組み、達成感を感じたり、次の学習に活かしたりできるようにした。
- ・ 友達の発表について感想を述べ、他者評価する機会を設定した。

授業づくりで「工夫すべきこと・配慮すべきこと」（5つの視点）

◎国語

5つの視点	工夫・配慮（項目）	工夫・配慮（具体例）	
物理的環境支援	・ <u>刺激の調整</u>	視覚・聴覚・触覚・固有感覚の調整（パーテーション、席の配置、明るさ等）	書見台の活用
	・ 教室 内の配置	言語活動・交流しやすい座席、通路等の配置、教材を操作しやすい学習環境	
補助的手段	・ <u>コミュニケーションツール</u>	イラスト・文字・単語の選択、選択肢の提示方法	書見台の活用
	・ 活動の見通し	選択の方法、絵カードの選択の場合提示の位置（上下左右）、手掛かりの提示、正誤を伝える	
	・ 児童生徒に合った教材	単元構成と学習の流れの工夫 重要な物は別に提示する（ペープサート等）、五感に訴える教材（視覚だけでなく聴覚、触覚） 大きさ・形への配慮	
人的支援	・ 注目を促す	児童生徒によっては直前に教材を出す、効果音を入れる等、一つ解決できたら教材	STとの実態把握及び共有
	・ 実態把握	集中できる時間、興味が持てる内容 児童生徒 の学習中の良さ を評価し全体に伝える（笑顔、発声、よく見ていた、つぶやきの内容） 既習事項、指導内容の理解、集団の中での実態差、学習内容の得意不得意	
学習機会	・ 話、映像の視聴	話の選択（見通し、長さ、わかりやすさ）、把握のさせ方（注目してほしい場面で止める、サイン・カード・動き）	学習の積み重ねの実感
	・ 体験的活動	クイズ形式・パズル・ゲーム、教材を自分で操作する活動	
	・ 実態差に対する対応（集団）	個人で課題に取り組みその後集団で交流する、ヒントの出し方のルールや手本、辞典や教科書の活用	
多様な評価	・ 教師の評価	児童生徒が自分では言葉にしない表現についてフィードバックする	振り返りシート等を活用した自己評価
	・ 友達の評価	友達同士が良さに気付けるような出題の工夫、良さを発表できる機会	

< 課題 >

- ・ 国語は児童生徒の実態に合わせて年間を通して横断的に授業を行っていることが多いため、各授業における単元計画の作成には難しさを感じる点がある。